

地域に生きること

—D.アレヴィー『中部地方の農民を訪ねて』（1935年）にみる農村世界—

槇原 茂

はじめに

外国の歴史、まして過去の田舎の暮らしなど知ることに何か意味があるのだろうか。この問いに、自信をもってイエスと答えることはできない。しかし、少なくとも私には、史実じたいが十分面白いし、それが現代日本とまったく無縁のものだとも思えない。たとえば、福祉の分野で障害者や高齢者の「地域生活」を支援することの重要性が説かれている。この場合の「地域」は、英語で言えば community であり、単なる空間概念ではなく、共同体、地域社会など一定の社会組織が含意されているはずである。だとすれば、「支援」を考える前提として、「地域に生きること」の意味を問うてみることも必要ではないか。そしてこの問いは、時代や文化が異なる世界の経験を参照することで、より豊かなものになるかもしれない。

ここに紹介するダニエル・アレヴィー『中部地方の農民を訪ねて』⁽¹⁾は、20世紀前半のフランス農村社会の変化に立ち会った一知識人の記録である。アレヴィーによって記録された対象は中部ブルボネ地方〔現在のアリエ県にほぼ相当する〕の農民ということになるが、両者は決して主体・客体の固定した関係にあったわけではない。半世紀にもわたる関係を支えたのが手紙のやりとり、文通であったように、両者の交流は、当時の農村の文化変容、とりわけ農民たちが自ら文字を通して語りはじめた状況と切り離せないものであった。本書の魅力は、彼らがアレヴィーを通して自らを語っている点にある。

以下では、ダニエル・アレヴィーの経歴と本書の成り立ちについて簡単にふれた後、各年代の報告記の内容を順を追ってまとめていく。た

だし、本書には個性的な人物が数多く登場するが、彼らすべてを紹介するわけではなく、とくに地域社会の変革にかかわった人物を中心にとりあげることになる。

著者の略歴と本書成立の経緯

著者のアレヴィーは、伝記作家、エッセイスト、歴史家など付けられる肩書はさまざまで、多方面にすぐれた作品を残したいわゆる知識人の一人である。その名前から察せられるように、ユダヤ人の家系に1872年に生まれた。父親のリュドヴィック Ludovic は著名な台本作家でアカデミー会員、兄のエリー Élie は哲学者、歴史家という知的な家庭環境に育ち、早くから文化的な素養を身につけることができた。エリート養成校の高等師範学校を卒業後、20代に遭遇したドレフュス事件に際しては、ドレフュス擁護派として知識人の署名活動をおこなったりした。その後、労働者運動に関心を持ち、ユニヴェルシテ・ポピュレール民衆大学の創設など民衆教育に精力を注ぐ一方で、ジョルジュ・ソレルやシャルル・ペギーらと『半月手帖 Cahiers de la quinzaine』を拠点とする評論活動にも参加した。そして、世紀初頭のさまざまな社会問題に関する論考を掲載した『自由ページ Pages libres』の創刊にもかかわった。彼の政治的な立場は左翼的だったとはいえ、特定の党派に属することは決してなかった。第一次世界大戦の前あたりから徐々に保守主義的な傾向が強まり、ヴィシー政権初期の政策を支持したことで「反動派」のレッテルを貼られるが、それも彼の個性のごく一部を表すにすぎない。むしろ、イデオロギーにとらわれず、知的関心の赴くがまま自由に著述活動をおこなった⁽²⁾。

この『中部地方の農民を訪ねて』も、アレヴィーの知的好奇心の発露といえる作品であるが、他の作品にない特徴をもっている。それは、文化人類学者の参与観察にも似て、ほぼ 10 年おきに現地を訪れ、全編およそ 30 年にまたがる記録になっている点、そしてすでにふれたように、アリエ県を中心とした中部地方の農民たち自身の声が収録されている点である。

アレヴィーが中部農村に興味を抱いたきっかけは、ある小説を読んだことにある。この小説が農民自身の手によって書かれたと聞き、半信半疑で作家を訪ねたところから話が始まる。作家の名はエミール・ギョマン、小説の題名は『或る百姓の生涯』⁽³⁾である。19 世紀後半のブルボネ地方の農村社会を描いたこの作品には、実際に土に生きる者の眼にしか映りえない暮らしの様子や習俗、人情の機微が活写されている。1904 年にアレヴィーは、はじめて彼の村を訪ねた。

「イグランドという村で彼、ギョマンに会った。この村の忠良なる子は、彼が住まう質素な家にいた。私の疑念は消え去った。半信半疑だったことを告白すると、彼は微笑んだ。『あなただけじゃないですよ。去年の夏、そこの道路の角に自動車が止まったんです。家畜小屋の前で肥やしを積んでると、声がして—ギョマンさんですか。—ええ、私です。—『或る百姓の生涯』のエミール・ギョマンさんですか。—そう、私です。すると車の人物いわく—いやはや、とても信じられない気がします！ [p.59]」

こうして、アレヴィーとギョマンの終生にわたる交友がはじまった。ついで 1907 年、ブルボネ地方の農民運動に興味を抱いたアレヴィーはふたたびイグランドに赴いた。このとき、ギョマンの紹介でアリエ県の農民運動の指導者ミッシェル・ベルナルに出会い、アリエ県の小作人組合創設に関する貴重な記録を残すことになった。

1907 年の訪問記は、書簡形式の「ブルボネ便り」と題されて『自由ページ』誌に掲載された。このときはまだ、その後の変化を記録しつづけるつもりはなかったようである。ギョマンらと手紙を交わすうちに、アレヴィーは再度の訪問を思い立つ。そして、1910 年の訪問の後で再び記録を著し、翌年別の雑誌に発表した。

第一次世界大戦中も交流は続き、1920 年には農村が豊かになったという噂の真偽をたしかめに再訪した。この新たな訪問記と 1910 年の記録を合わせたかたちで、『中部地方の農民を訪ねて』（1922 年）が出版された。最後の訪問記は 1934 年に書かれ、これと 1907 年の「ブルボネ便り」を増補して、本書の完成版が 35 年に上梓された。

1907年の訪問

当時、ブルボネ地方の農民の大半は分益小作農として、地主と総小作請負人による二重の搾取に苦しめられていた。1907 年の記録には、小作契約の詳細な内容とそれにたいするベルナルの見解が載せられている。小作農は、地主に対して小麦などの収穫物を折半するのみならず、無償ないし安値での野菜、家禽、バターなどの納入に加え、耕地を囲う柵や溝の造設・改修、荷車運搬の要求にも応えなければならなかった。さらに、多額の小作地賦課金 *impôt colonique* を加徴されていた。そして、地主に代わって小作料の徴収をおこなったのが総小作請負人であり、彼らも収穫物から手数料を天引きしたのである。

この小作人側に圧倒的に不利な契約に対して、ベルナルらはブルボネ地方農民組合連盟を組織し、抗議の声をあげていた。いうまでもなく、組合の要求は、小作地賦課金や総小作請負人の廃止など不公平な条件の是正であった。ギョマンも運動に加わり、イグランド村の組合設立のイニシアチヴをとっていた⁽⁴⁾。アレヴィーは、彼らの運動に賛同しながら、同時に当時の農村社会の変化にも注意を払っていた。

一つには、ギョマンが編集を担当した連盟の機関誌『農村労働者 *Travailleur rural*』創刊号のなかで、図書のリストが載せられ、農民たちに読書を勧めている点を高く評価した。おそらくそこには、アレヴィーの民衆教育運動にたいする関心が反映されていた。実際にいくつかの組合では図書室が設けられ、農民たちに本が貸し出されていた。小学校教師をしているギョマンの友人の話として、1906 年の冬にウジェーヌ・ル＝ロワの小説『フローの風車』〔第二帝政下、共和派の粉挽屋が地方当局や聖職者に抵

抗するストーリーに田園讃歌が込められた作品]が農家で回し読みされ、好評を博したことも紹介されている。各家庭では、夜なべのあいだ子どもが家族に読み聞かせる形態、集合的な読書が一般的だった。アレヴィー自身も夜の集いに参加し、ノアイユ伯爵夫人の詩集を朗読している⁽⁵⁾。

また、ムーランの商人が、農民は今やしょっちゅう町にでかけるようになり、恵まれた暮らしを送っているのに不平が多いと語るのを聞いて、アレヴィーは農民たちに直に幸福かどうかを尋ねてみた。彼らは自分たちの幸福を否定はしなかった。商人の言ったように、物質的には豊かになり、若者は自転車でダンスホールに行き、娘たちは香水を買うようになった。照明具も、かつての松明から獣脂ろうそく、小さな植物油ランプを経て現在の石油ランプまで進歩してきた。都市に比べると、失業のリスクもなく、空気もきれいだ。しかしアレヴィーは、相手の若者がそう言いながら、顔を曇らすのを見逃さなかった。この訪問以来、ブルボネ農村社会の変革の積極的な面のみならず、その陰りの部分、若者の離村と人口減、いわゆる過疎化の問題が強く意識されるようになった。

1910年の訪問

つぎの1910年の訪問記でもっとも注目されるのは、村の諸団たいまつ体の形成を詳しく紹介している部分である。

「1870年の〔普仏〕戦争後、最近になって漸くフランス農村民の性格が変化した。この「村」は生まれ変わった。第二帝政が禁止していた団体が根をおろしつつある。イグランドに身をおき、諸団体を数えてあげてみよう[p.119].」

筆頭にあげられているのは、読書協会である。1874年に数人の共和主義者によって結成され、少年期に加入したギヨマンはここで貴重な読書体験をした。ただ、会の定員数が20名と決まっています、やや閉鎖的な性格を有した。これとやらんで、文化的な目的をもつ団体としては、カトリック・サークルや社会研究グループ・デチュード・ソシアル会もあった。前者は、シヨン〔M.サンニエによって1893年に創始され、積極的に民主政の擁護を唱えた

カトリック青年運動。〕に加入していた助祭が1907年に設立。約15名の青年が週2回司祭館に集ってゲームや歌唱、談話を楽しんだ。小規模ながら図書室も備えていた。社会研究会には約35名の加入者がおり、名称から受ける印象とは違い、社会主義的傾向の雑誌の購読のほかには、幻灯の上映や子どもの祭りを企画した。ついで、社会的性格を有する団体としては、すでにふれた小作農組合(約40名)のほかに、全国労働総同盟傘下の農業労働者組合(1904年～、約40名)、共済組合(1894年～、約160名、20名の名誉会員)、家畜保険組合(1904年～、約10名)、年金組合(1904年～、ピーク時の約100名から減少傾向)、割木工組合(1905年～、39名)があげられている。

このような団体形成の動きは、村外の世界との新しい関係ももたらした。この点に関して、南仏エロー県マロサン協同組合のワインが印象的な光景をつくり出していた。1回はベルナル家で、もう1回はギヨマンの隣人宅でアレヴィーに饗された。

「〔ベルナルの〕母親は、山羊のチーズを添えた丸パンとグラスをテーブルに置く。ほどなくグラスには、……白ワインが輝く。マロサン協同組合のぶどう栽培農がブルボネの組合員に安く販売したものである[p.67].」

「若者たちがわれわれをテーブルに招いた。グラスにはマロサンの赤ワインが注がれていた。『お飲み下さい。高価なワインじゃありませんが、うまいですよ!向こうの協同組合がつくったものですが、われわれの組合で購入してるんです[p.94].」

これらの光景において、マロサン村のワインは、中部農民と南仏農民のいわば連帯の象徴として捉えられていた。

第三共和政が確立された1880年代から第一次世界大戦までの時期、フランス各地の農村で同様に団体の叢生がみられた。私は、このような多元的な結合関係の浸透を民主的政治文化の定着化に関連づけて論じたことがあるが、イグランド村の事例はまさに典型的といえる⁽⁶⁾。これら多様な団体の叢生を、アレヴィーが「イグランドの革命」と評したのも決して誇張ではなかった。彼が出会った農民の多くは、自分たちの置かれている状況を認識し、実践的に問題を

解決しようとしていた。彼らの主体的な試みを促し、支えたのが諸々の団体だったのである。

「1700人の村に9つの団体やグループ。かくして村の暮らしは一変し、新しい習慣が根づいている[p.121]。」

この訪問でアレヴィーは、ジュール・ルージュロンやアンリ・ノールといった新たな知己も得た。ルージュロンは、ドメラ村のぶどう栽培農で、熱心な地域の改革者でもあった。前世紀末フィロクセラ〔ぶどう根アブラ虫病〕によって壊滅したぶどう畑を再建するために組合を組織したのを皮切りに、村の共有地で共同出資のぶどう畑「蜂巣」を創設したり〔ルージュロンはこれを「共産主義的ぶどう栽培地」と規定した〕、また籠製造などの産業を育成して村おこしにつなげようとした。またノールは、いわゆる篤農家の代表的人物として紹介されている。ショーモンテルのやせた土地の購入からスタートし、勤勉と研究熱心によって収穫の増大、地所の拡大、富裕化をつぎつぎと成し遂げたことで、この地方一番の農民と目されていた。単にすぐれた営農家というだけでなく、自ら改良した農法を活字を通して地域に広めようとする意志と、農業こそ独立不羈の精神を培うという信念のもち主でもあった。その後彼は、完成の域に達したショーモンテルの地所を娘婿に譲り、新たにペリゴール地方の旧貴族所領だった荒れ地を購入、その開発に全力を傾けた。1920年の訪問に際し、アレヴィーはペリゴールまで足を運び、見事な農地に生まれ変わった土地を見て感嘆することになる。

だが、これら改革者たちの活躍は逆に村の深刻な現実を映し出してもいた。早くからアレヴィーは、ブルボネ農村が過疎化しつつあることに気づいていた。村々を訪れるたび、彼は役場に行き人口の変動を調べた⁽⁷⁾。ルージュロンの「蜂巣」や籠特産化の試みにしても、ノールによる農法の研究と執筆にしても、過疎化に歯止めをかけようとする彼らなりの対処法でもあった。如何せん、はかばかしい成果はあがらない。彼らの批判の矛先は、学校教育にも向けられた。ノールは、一人娘を近くの町モンリュソンのお嬢さん学校に遣うことをやめた。何人かの校長の話聞いて、彼は言った。

「娘よ、決してお前のものでない社会と交わ

りたいのなら、モンリュソンの学校に行くがいい。お前の生涯で決して必要としないものを学び、常に必要とするものを何も学びたくなければ、そこに行くがいい[p.155]。」

また、1934年の訪問記に出てくる話だが、両大戦間期にアリエ県農業組合連盟の会長になったルージュロンは、農村教師の研究会設立に期待をかけ連盟による多額の寄付をおこなった。自らも研究会に参加し、小学校で農業の基礎知識を教えるべきだと唱えたが、反響はなかった。アレヴィーに再会したとき、彼は教師にたいする深い失望を吐露することになる。

1920年の訪問

この問題に関しては、1920年の訪問記に登場する小学校教師アルベール・ヴァンサン⁽⁸⁾の発言が興味深い。彼は、ボージョレ地方の僻地の村で農民子弟の教育に情熱を燃やし、過疎化と闘っていた。1880年代に確立された公初等教育制度が、共和主義イデオロギーを重視する一方で、実生活に役立つ基礎的な職業教育を怠っている点を批判し、従来の師範学校とは別の農村教員の養成システムが必要であると説いた。ところが実際には、都市の小学校のポストには20件もの願書が届くのに、農村のそれには1件もなく、特別手当が要る有様だった。1934年の再訪時、アレヴィーはヴァンサンの引退と、彼の努力の甲斐もなく村の人口が半減したことを知るようになる。

1920年の訪問は、第一次世界大戦中から戦後復興期にかけて食糧など農産物の需要が増え、農民の暮らし向きはよくなったという噂を耳にしたアレヴィーがその真偽をたしかめにくという筋立てである。ヴァンサンのほか、アレヴィーが現地で出会った旧友たちの証言はむしろ否定的で、人口流出は止むことなく、農民たちの疎外感や危機感はいっそう深まっていた。ルージュロンによる籠製造業は挫折し、共産主義的ぶどう畑「蜂巣」はある程度の成果を収めたものの、さらなる発展の見込みはなかった。ノールは、上述のようにペリゴール地方ですばらしい農場をつくりあげながらも、農業労働力の不足に悩まされていた。規律化されたパリの生活を嫌悪し、農業にあこがれて隣りに引

っ越してきた若者夫婦に、何くれとなく世話を焼いてやったが、彼らは数年後にパリに戻ってしまう。また、ギョマンは言った。子どもを都市に奪われた農民たちは、自尊心をいたく傷つけられている。辛いことに、彼らは子どもを通して都市世界の農民蔑視を知るのである。娘たちは、手に肉刺をつくるのを厭うようになった。

旅のはじめの予想に反して、農民たちの不満や焦燥がいつそう強まったことを知り、アレヴィーは農村文明の衰退にたいする危惧の念を抱くようになった。

1934年 —最後の訪問—

1934年には、アレヴィー自身すでに60歳を越え、長年の友人たちも老境に入っていた。この往訪に際して、小麦価格の下落を農民たちがどのように受けとめているのかという問題がとりあげられた。小麦価格の規制は両大戦間期最大の農業問題であり、道中のバスの運転手との会話で早速話題になった⁽⁸⁾。この価格下落は通常、世界市場における相場下落とフランス国内の過剰生産が相まって生じたものと説明されている。しかし運転手同様、農民たちがやり玉にあげたのは、製粉業を中心とする不正業者たち、さらには彼らと結託した政府当局による市場の恣意的な操作だった。アレヴィーはまたもや彼らの根深い恨みの念を感じるようになった。

知己の中ではただ一人ルージュロンの様子が詳しくとり上げられている。

「わが旧友、このドメラの夢想家、改革者、教育者はかつて村外では無名だったが、今やフランスを代表する農民の一人になった。アリエ県の〔農業組合〕連盟の会長であり、この組織を策謀や政治から守り、正しい路線を歩ませている。彼は、〔組合の〕全国大会に何度か呼ばれ、喝采を受けている。その情熱的で愉快的な演説は人気がある〔pp.298,299〕。」

ルージュロンは、先にふれた学校教師批判やら、均分相続の平等精神が耕地整理の成果を損なっていることの批判やら、相変わらず意気軒昂だった。しかしアレヴィーは、彼の別の側面を詳しく紹介している。

アレヴィーが訪れたとき、この「改革者」は

ちょうどバラ園造りに精を出しているところだった。彼は教会嫌いでも知られていたが、このときの話が振るっていた。大略次のようだった。……ある日、聖ペテロが夢枕に現れて言った。お前は人のためにいろいろな試みをしてきたが、どれもうまくいかなかったではないか。一度ぐらい成功させないと、天国の門を開けてやらぬ。そこで、ドメラの村人のためにバラ園を造る決意を固めた〔pp.297-301〕。

このエピソードが詳述されていることが、アレヴィーの関心の変化を物語っていた。上述のように彼は、前回の訪問以来、農村文明が危機に瀕しているという意識を抱くようになった。そして、この最後の訪問記では、農村社会の具体的な問題よりも、文明論そのものに力点が置かれた。

彼がまず向かったのは、アリエ県北西部に広がるトゥロンセの森であった。そこで郷土史家から、森の歴史〔ルイ14世の財務総監コルベールが造船用木材生産のために保護したことで知られる〕や奇跡の泉伝説について詳しく聞き取りをおこなった。さらには、森の自然、鹿などの野生動物を愛し、研究を続ける小学校教師に会いに行き、深い感銘を受けた。そして、ルージュロンによるバラ園の造成。これら全体がアレヴィーにとって「農民的世界 *monde paysan*」であり、その本質は、太古より命を生み育んできたことにあった。これに、「近代的世界 *monde organisé à la moderne*」（テクノロジー、近代工業、カルテル・シンジケートなど）が対峙しているのであった。それは、命を育むことはない。最後にアレヴィーの眼差しは、エコロジーに向けられたといえようか。

おわりに

以上、アレヴィーが残した4回の訪問の記録をみてきた。要点をもう一度確認し、本稿を締めくくりたい。まず、第一次大戦前の2編の訪問記では、農村の社会的結合関係の変化が見事に捉えられていた。諸団体の多くが農民主体で組織されたことは、アレヴィーにとって、農村の社会的関係の「革命的な変化であった。とくに、それが村の内部のきずなを再構築しただけでなく、地域を越えた関係をもつくり出して

いた点を忘れてはならない。

つぎに、農村の過疎化にたいしては、産業の育成、農法の改善、民衆教育などさまざまな対策が試みられたが、人口減少に歯止めをかけることはできなかった。アレヴィーにとって、それは文明的な危機にほかならなかった。のちにギョマンの娘シュザンヌ・スションが著した「エピローグ」によれば、第二次世界大戦後も人口減少は続き、たとえばイギリスの住民は千人にも満たなくなる。ところが他方で、共済組合や農業組合が引き続き発展しただけでなく、食肉生産協同組合などの新たな職業団体が加わり、読書協会やスポーツクラブ、あるいはカーニバルを主催する委員会など、村の共同性のあり方はますます多様化、活発化している。この後日談は、アレヴィーのペシミスティック

註

(1) 本稿で参照したのは、以下の *Livre de Poche* 版である。Daniel Halévy, *Visites aux paysans du Centre (1907-1934)*, Bernard Grasset, Paris, 1978, 448 p. この版には、近代農村史の第一人者M. アギュロンによる序文とギョマンの娘シュザンヌ・スションのプロローグとエピローグが添えられている。アギュロンの序文は、民俗学、地理学、政治史の観点から本書のポイントを解説しており、示唆に富んでいる。シュザンヌの文章は、アレヴィーとギョマンら農民との交友を家族の視点から裏づけ、本文には出てこない貴重な情報を提供してくれる。さらに巻末には、本書の登場人物が執筆した書簡や記事が多数収録されている。これらすべてが、本書の史的価値を一段と高めている。

(2) D.アレヴィーの評伝としては、以下を参照。Sébastien Laurent, *Daniel Halévy; du libéralisme au traditionalisme* (Paris, 2001).

(3) Émile Gillaumin, *La Vie d'un simple* (Paris, 1904, rééd.,1943).ギョマン (犬田卯訳)「或る

な予感を裏切って、人口流出が直ちに農村社会の崩壊につながったわけではなかったことを教えてくれる [pp.362-390]。

もちろん、ブルボネ農村の変化やそこに住む人々の声は、アレヴィーというすぐれた媒介者なくして、われわれに知られることはなかっただろう。しかし、彼をすぐれた媒介者に育てたのは、農民たちとの対話であり、彼らが送った手紙や記事であった。そしてアレヴィーは、期せずしてネットワークの中継基地のような役割も担ったのである。とくに 20 世紀初頭においては、地域社会の自己認識から変革にいたる過程で、手紙によるネットワーク形成が果たした役割は相当重要であったように思われる。この点は、機会をあらためて論じたい。

百姓の生涯——小作人の実話——『新興文学全集第一七巻』平凡社、1928年。

(4) ギョマンはこの組合運動の経験を題材に小説『ボグニユー組合』を著し、アレヴィーに献じた。Émile Guillaumin, *Le Syndicat de Baugnoux* (Paris, 1912).

(5) 19 世紀後半の農民の読書については、拙著『近代フランス農村の変貌—アソシアシオンの社会史—』刀水書房、2002 年の第 4 章を参照。

(6) 前掲書。

(7) 具体的な数字が挙げられているのはイギリス村とドメラ村で、前者が 2,145 人(1884 年)から 1,702 人(1910 年)に、後者が 3,680 人(1886 年)から 2,814 人(1926 年)に減少した。ただしドメラは、工業労働者の移住によりその後若干増えている(1931 年に 3,044 人)。

(8) この時代の小麦問題については、中原嘉子「1920 年代におけるフランス農業組合組織と小麦問題—小麦市場組織化問題を中心として—」『お茶の水史学』22 号、1978 年を参照。